

「職人」は、大丈夫かな、と思うくらいなかったですよ（笑）。逆に「陽介、社長になるんだから協力してやるよ」と皆さんが言ってくれたことを覚えています。ただそれに甘えているだけではダメですし、知識や技術で負けたくないという思いもありましたから、社員の皆さんをライバルだと思って勉強に励む日々でした。色んな人に話を聞きにいったり、本を読んだり。甘やかされるのではなく、対等に認められたいという気持ちがあったのでしょね。

——では、「相内組」にいられたからはいかがでしたか。

当社に関しては20人くらいの規模ですし、課題がはっきりしていると思いましたが、当社に来て半年くらいになります。これまでやってきたことが今になって一つずつ実を結んできていると感じますね。経営再建へ導くために来たわけですし、目に見える結果を出さなければなりません。ですから今期必ずや過去最高益を挙げて、社員の給料を引き上げたいという思いです。

——社員さんに対しては、どのようなアプローチをされているのですか。

基本的には「今のままで良い」と言っています。私が来たから全部変える、というような事をしていたら反発もありますし、社員は面白くないと思うんですね。ただ、「これは駄目だよ」という所は直さないといけない。それを指摘する時には、彼らのやってきた今までのことをしっかりと尊重して、「それをどうやって伸ばせるのかな」というスタンスで関わるような形にしています。

——職人の皆さんは、自らの仕事にそれほどプライドをお持ちでしょうか。配慮が



special interview

執行役員

大久保 陽介

松尾 伴内



職人一人ひとりの地位向上のために尽力し 建設業界をもっと盛り上げていきたい

行き届いていると感じます。

私は、職人に対する振る舞いに関して3つ大事にしていることがあるんです。それは、「尊敬・信頼・我慢」。この順番が大事で、やはり毎日現場に出るといのは凄いです。それを当たり前前に行けるといことは素晴らしいと、まず職人を人として尊敬する。その上で、例えば技術が発展途上の人に対して「絶対にできる」ともしくは「今できなくてもいつかはできるようになる」と信頼するべきなんです。それでも、最終的に上手いかなということがあるあります。人間ですから。その時こそ、我慢なんです（笑）。

——どんな人でも、何度か失敗して、そこから学び成長するわけですから、それを阻害しないことが一番ですよ。最後に、今後の目標を教えてください。

はつきり申し上げますと、建設業の仕事は、どうしても世間から下に見られることが多いと感じています。実際、就活生に内定を出してもそのご両親が「辞めなさい」「せっかく大学出したのに」と言っていて内定辞退するケースがこれまでに何度もありました。現場の職人の方々は本当に凄い技術を持っていて、誇り高い職業なんです。それがまだ世間に浸透してないと感じるので、職人の地位を今後もっと上げていきたいなど強く思っています。そのために、まず地域からの理解を得るための活動に力を入れていきたいです。例えば、地元の小学校・高校と連携して、建設業について知ってもらう機会を作ったりですね。そして職人さん自身でも「自分たちは凄い仕事をしているんだ」とプライドを持てるような環境を作っていきたいです。そうす

「大久保恒産」のグループ会社の一つであり、主に仮設足場工事などを手掛けている「相内組」。そこで執行役員を務め、同社の経営をより良い方向に導くという責務を負っているのが大久保氏だ。職人の方々を尊敬し、地位向上に努めたいと強い意思を抱く同氏に、今日はタレントの大久保氏がお話を伺った。

——現在「相内組」で執行役員という役割を担われている大久保氏ですが、そこに至るまでの経緯をお聞かせ願えますか。

当社は、「大久保恒産」という足場工事を手掛ける会社のグループの一つです。「大久保恒産」の創業者は私の父で、一度はその後を継ぐ形で「大久保恒産」の社長を務めておりました。そんな中で、「相内組」の社長が体調不良で不在となってしまい、それに伴って売上も落ちてしまいました。そこで父に「お前が立て直して来い」と言われ、「相内組」の執行役員として経営再建を任せられるに至ったのです。

——そうだったのですか。では前後しますが、大久保氏の歩みからお聞かせいただけますか。

生まれは神奈川県横浜市青葉区奈良という場所、当社のすぐ近くです。2歳で引越して、母と私2人が川崎市に移りそこで大学院卒業まで過ごしました。大学は大学院時代はずっと研究に没頭する日々でした。従って将来はそちらの方向に進むということも考えていました。父は建設会社の社長ということもあり怖い印象はあ



after the interview from 松尾 伴内

「自社のことだけではなく、建設業の未来について本気で考え、本気で変えていくために挑もうとしている大久保氏。その情熱に、感銘を受けました。私も、職人さん方の仕事には強いリスペクトを持っていますから、その地位が上がっていくことを心から願っていますよ。大久保氏の活動が実を結ぶよう、私も陰ながら応援させていただきます。頑張ってくださいね！」

父から受け継いだ「職人の血」

▼大学～大学院時代には航空宇宙の研究に没頭し、アメリカで開かれた国際学会に口頭発表で参加したこともある大久保氏。父と同じ建設業の道に進むことを意識し始めたのは、大学院一年目のこと。父が創業者である「大久保恒産」が45周年を記念し、横浜アリーナを貸し切って1300人ほどを集めて大きな式典を開いたのだ。その時「これだけの人を集めるなんて、父は本当に影響力があるんだな」と思ったという。そして迷った末、建設業の道に進むことを選んだのだ。その後、父を蕎麦屋に呼び出し、二人きりの状況で自らの決心を話した大久保氏。それを聞いた父は下を向き、10秒ほどの沈黙の後「血だな。お前は研究の道に進むと思っていたが、建設の道を選ぶというなら私の血筋だからとしか考えられない」と話したという。息子に自分と同じ職人の血が流れていたと知った父親が、胸の内ですれほど嬉しく思っていたかは、想像に難くない。



▲「大久保恒産グループ」集合写真

たのですが、ユーモアがありましたし、人を惹きつける能力がある人でした。そこで研究の道と建設の道を天秤に掛けた時、「父のような人間になりたい」「父と同じような道を行けば、人としてより成長できそう」と思い、後者を選ぶことにしたのです。そして大学院を卒業した年の4月、「大久保恒産」に新卒として入りました。

——自分の息子にそこまで思わせるわけですから、お父様は本当に格好良い方だったのでしょうか。実際に建設業の世界で働き始めて、いかがでしたか。

もともと、2000坪くらいある資材置場を整備するという仕事をずっと父がやっていたんです。それで入社した直後は父に「俺の近くで学べ」と言われ、一緒にその仕事に携わること。1年半くらい続いた後、次のステップに進みたいと父に頼み込んで、足場工事の現場に入りました。現場に入って、人手が足りないと思いい、採用活動と研修にも携わってきました。

正直なところ、最初から現場に入りたいと思っていました。しかし後から聞いた話なのですが、父が私を離したくなかったらしくて（笑）。やはり息子が可愛かったのか、自分の目の届く範囲に置いておきたかったというのはあるのでしょうか。また、本当に現場をやってほしいけど、上手くやっていると懸念していたというのもあったそうです。ですから、自発的に「やりたい」と言っていた良かったなと思いますよ。足場の仕事は事業の柱なので、そこは早めに経験しておきたいと考えていましたから。

——お父様に可愛がられていたのですか（笑）。しかし、その分他の社員さんからの風当たりが強かった、などということはある